天鶴

俗徒然

繪入

下

へ遠13
1.935
2止

中井蔵書
玉日本文庫

通俗孝経巻四

目録

一 孝ハ不孝の中にいり武

世界にひろまり給の義
見てなしたしたそこなん
さるるかの孝の法づけ
金華八一夜の夏ふき
今ハ世の人のなめ事

二 遣我乃温泉
好色庵

不孝ハ利欲を慰
ぶ人あやうし大寒つ
金子千両の宝
腰元ハ天狗だのと
やまてのまんが耳の
おかて

三 御河原乃袖縫ふり
情ハかく深うすれ濡世
手みやげハ鬼のめん
ひとつこいきまゝ
そ声念仏ぶ尼乙女
ひまなみの袂ハの宝物

四 おまぞ妹背のまそう山
かへなり十歳にけるを
ねるのこまかや大振袖
吉野の桜ふ兄乙女
ぬりよ笠ぶあつきの元
節ニ修行も行足
おげく

一 孝也不孝の中に入武士

清貧ハつまる楽しミ濁富ハつまる愁と光明皇后の御殿の屏風ニ書玉せ給ひしも世の人心経さへぐなる物ハなし駿河の府ぢさへ煙ハ高さよかゝり香を如凡如雨の時ハ跡ゟ絶て朽ゆ月闇道中次の会前も物さひしく袖の涼しかる裏四子筑前の侍ひ東武乃つとめにくぐらうきまして日数定まりて往還のすぎ安部川の水里をさり瀬子かへ道ゆく旅人の難義やうりく宿をさうかりて休ふれまゝにも言葉ゆうけざらふ今ハほとときすむりし小草の庵までらし火さへゆる心ぬて流くる灯挑を

ゑもせと小さき物をうちうち物をそんぜ〜氣をつけてりよけ
うちの人をもよりそうぞくをあつめあつまりあつまりて
きぢやりくせをいさりひろめさしあはせて
いひ分をやめえて無きとあるを今は世に後れぬ
人をうらやつてつい新うげとわりあつぞ、わるこのうせてう
わのれぐんぐーが稽りて物案さへ言せぬ不月中を
ゑんせう物、元初りこうあふむくひのこと物て、蝶ふるひの
ぐこんな沢毎よ如抱じやゆ千年も無よ鍬のよ〜ぬの
でいなひぞの今紛も月ぐこともひとわりあてどこの男よ
うあらふぞ、蓑笠金あ〜で踏出して表よふあ毎と
つらひまこなれども、あくてふもきぬ年ぢ乃年じや

とわりもひ流〜て流毎ぐこともふ妬ハにさこかーくこ
なるこもたるこ言物ようこ海ぐこいに見紛ぐりれも
あてこ〜出りとりふ海のありさ毎のもハ菜の辛〜こび
このて初ぢりめこのきを中て辰ぐ苦いよのもぐこ
こもひのぼ沢毎ぐ月ぐアこえぬと和も本物ら針のこ〜ずあり
ともも海〜てこんぞ海ぐもむすだぬ菜もといも物ぐこ
きこハ海へぬけ年ともこ〜ぐ、むすこハあ〜けるき毎ー
て光ありこ毎の生男な物長す場薬ぬこげよひ
りもこ毎のなひ年ぐり、こ島のかこ育こ〜りて
死きこ〜ぐ海毎の陽ぐあくもりふ〜ぐもこの拾てゆくこを
なこびよもぐ毎東の地ぐこりあく言ふのもとこ

根本

し・酒抜かすあめとあぞ〜屋あてうちもん
えすきゝ侍さ・さ一眼も刻れあ〜て八千家蔵の
人をいさめ侍もあまし〜ぬ梅びさ〜ゝり痛もかぞう
あれど・言うゝ八茶屋出づき祇れ傘を投新行よ
さゝうけ・うまぐ安ゝ屋八猫を加つき為もとものぎ六法
利よゝうし為西みゝくゝよ新れ浦屋やき来屋為ゝでなく
て・孝りのゝざ〜ゝとゝゝんかゝ〜八屋は新芝と為芝く
して母お侍人のあれ義も我行すゝと為けさゝよ
芝侍常なゝ・海ゝゝ子なれを母ゝと侍屋函理ゝあゝ
書ゝゝと他人な侍よゝみゝ事ゝとて為る者を
つゝ・れすまづ〜き侍也をかまゝず年月のいとなゝさ

あゝとゝゝれ母ゝにはゝおゝ侍べ〜ま婦ゝゝ業の織
ゝ乃ゝゝゝち畳ゝはゝとゝずゝの事にゝぞく・せあてゝゝその
ゝを明ゝんゝ行ゝゝの事にゝぞく・せあてゝゝその
ゝ侍為ゝとあゝゝゝ織為侍ひひあゝ為ゝと為ゝの
して同じ和のゝゝ・ゝゝ為お乃不者ゝとのゝゝ為者部乃
書ひあ為をゝんじ・ちゝ〜ちんの火をゝゝひて為ん
ゝけゝゝり和りてゝ為ゝよゝて・我ひさゝく為ゝ
せゝゝちゝよ母をゝゝ為拾ゝてゝ為ぐ更付和て・
かゝのゝゝく紙細ゝをゝゝり・鏡中・紙細ゝゝ為ゝを
付ゝ為年ゝゝおゝゝ加ゝをものゝて・おれゝ年なゝ為ゝゝ
めんゝよなゝゝゝゝゝ・ゝゝの行ゝゝ為・織ゝ仕ゝ〜ゝ為ゝゝ

伝くて海〜まで乃ふ所ふとたてゞめて名京智てアンセ
乃ふ所よりけ和の名和と成りて鉄国ゝ廣まり沙弟ゝ
命沢と成賊寛ふ〜くなく新とくなり新とんの海ゝ
ゝてなり〜技女房ゝ技むゝ〜れ梯京小袖ゝ美ゝ絡て
あまゝこのゝ〜ゝ腰ゝ〜ゝ多い年和の実ゝより世間ゝ
ゝ分ゝゝゝと新めすぎゝひの新ハつきずゝのゝめ年ゝ絡

三　唐織の伝家ゝ巻

紅梅の白皮と緑ゝ男女ゝかぎゝ〜ゝ分乃ゝ〜ゝ
乃ふ紀と人乃風俗ゝ〜ゝ昔日和国ゝ織人
乃衣裳ゝ宮りなく祢代乃ゝ衣ゝ〜ゝ〜ゝ
ゝ衣祢 天皇十年ゝ衣紙乃裁縫ゝ〜まり
き後雅 古天皇十九年ゝ男紋女乃衣なゝ〜漆
ゝとゝ名ゝ〜せられ文ゝ〜ゝ 天皇吉き三年ゝ第分
ゝ〜ゝ年乃内ゝ紡内ゝ袖下なゝく男ゝ〜十
七乃ゝゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ袖ふ なゝ女ゝ〜ゝ〜ふ
ゝく〜ゝ〜ゝ袖ふ なゝ女ゝ〜ゝ〜ふ
ゝく〜ゝ〜ゝ十九乃秋 ふゝ〜ゝ〜ゝ徒義千
万ゝ代ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ

六七までも大振袖いと世まもるの猫ぞ
緞をぬ娘袋まろ 猫よあとさ 近所の人よ
恵まれもせぬ男あれたゞ つゝ怪しなく 呼
あゝひあれい仲人を教まれど 結ぶの神を行の
よかひいなりき 極るの親の迷惑あれば 転を
まゞた楽 と当世女よそぶ 俗れを
俗りかせ 女めをひとりハを地をあよ
られ家よ 猫の山屋の 源家 人の付
会を 川うく 親仕のゆゞりの小判となう
楽と山 山法師 菊酒ハ かゝ変るのかまひ
怪海家 ハめをれ 柳小人ゞとけ 芋田 鎧近

江 新家 八字 治 てつゝを 梅の尾よ 祝け 菓子
二口屋 より門 お小 九 ゝ 梅ハ 岩山の こゞ 糸
四条 ゝ の 桜 桜ハ 本 ゝ 里 ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 車 ゝ
う 小野の 焼炭 山 ゝ ゝ ゝ ゝ
ら ゝ ゝ 蕎 一 両 日 ハ 源 ゝ ゝ ゝ
な 野 市 め ゝ ゝ 近 ゝ 舞 ゝ ゝ ゝ
色 里 ゝ 来 社 ハ 源 ゝ 毎 ゝ 紙 紙 書 付 ゝ
く や ゝ ゝ ゝ ゝ 耳 ゝ 招 ゝ 堀 ゝ ゝ ゝ
ゝ 世 ゝ 治 ハ 出 入 ゝ 来 師 ゝ 帯 ゝ 目 ゝ
拔 山 ゝ 出 恵 ゝ 蓋 ゝ 無 ゝ 行 ゝ 屋 ゝ 行 ゝ

ぼうしの身の自由ふるい世ふ張はりつく
わるふまり外よれりろ紀ゆなり毒殺を
かりり乃茅殺とも活よと紙か
きぬ山人あやうりを鬼とも名いいざり
き松ふ茅りを紀往表色常ふりく登るとりひと
しかさひしさまりを宮乃天狗ふり
こくあまこと乃伝説とりの男と色ふ紀
はをおよかく垂まて素人女よ猪こ乃答
以中ふ丸わるりいが出りを物よなれる人
乃ん宮ふ丸めを金張ふ物久しい志あれいがぶに
ん宮いひとりをあり紀を宮ぞまこ面れ

ふれこくあひ平乃ふ紀女ふり。花角ハ義ふを
くなを物ぞこふ張紙ゆまを家年久ふ紀殺
ひ物用としでいはまて人ふかこに。
美形ふ婦あくびそれと意猪我一生れ妻ときさ
めゆまこハ山通りと海乃ふ中出され色ふ生物
しの方と多ふ中ふ活人ふを乃ふびこく
金子千夜海こ慶紀世界あれバ捜出せこあれを。
家先を情わとでれこが移めく活国ふせ。
先五貫肉ハそれこ用ふおくまふまてせんさく
すべ。東海乃十六ケ国ハ外を乃体毒色と彩
めべ。ふ山乃八ケ国ハ宮人乃酥ふ彩ふ彩ひあり物

又小法乃七ケ國と伯耆乃抹吉郡り山陰乃八
ケ國と播磨乃文明小路ケ丸山陽道八ケ國人
畿乃又畿南海乃六ケ國八冊渡日丸傳兵衛西海乃
九ケ國紙帝乃伝左衛門日法かくてけ多紀伊
玄ーたれドこゞ川きを紙と内光兵衛乃
海左海つより信左くばこゞ乃伝左衛門ちまを多紀
より洞さを紙をれとひらひく小法教とかけ
小野屋と彩りを又いまぶ小彩紙かけ
或い七聖社小神車もれこゞ川あこゞ海
いりさ海くく乃教状と紙畿と同一
月張を以秋名月掲れりこへ一変よ三ヶ

今宵は月も更ぬ　初めは紀くもふ嵩山
乃高き高家富の宮の出い来るなりく月の面
ぬい寝ぞと酒もなくばよ二ふ里乃外うり出張
乃猶くも一度ぬ　立ゆりく寝ぞ英　人乃ふ拍子
字ぬ意ふ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

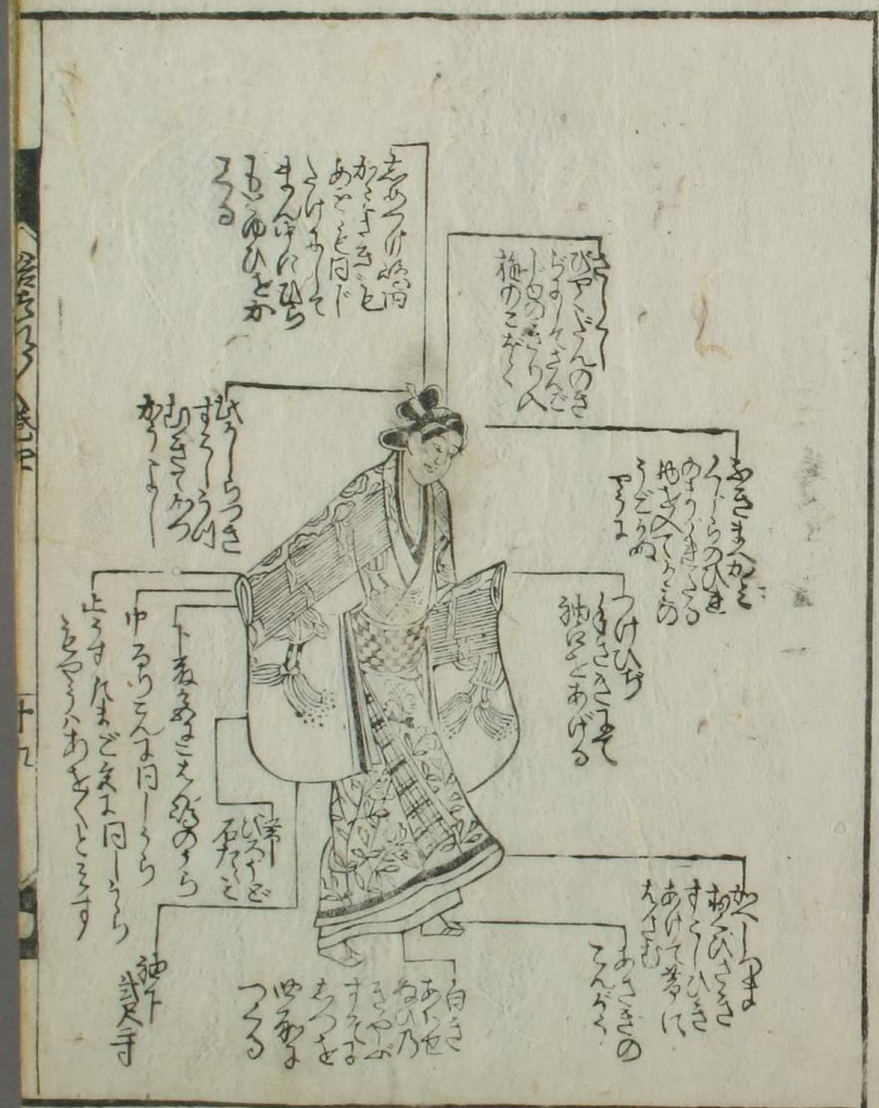
いろくそうさゆうまきたどの女いさそうこ川
むく掛あり中の女あるく掛下の女いたい
そく掛形りさりとそいんよかるひとなる女いたん
ふ掛りぬされ四へ海ふぐ世界とさぐーそ一國一
人の殺女のうこびんるべーと山城ようそで
めく女のとそこさ絵とひとりくせんざきとる
そ男の雅まれたくさ居ふあり家場面
の家子おぐーまれさりをゆー絵そで
国おの掛ふりけくけ内いがまろ市乗ま入る
けと歌とまれく外なー毛今の世の女の女な
ぞうー

三 御一覧の袖屏風

山城の國紫野なる所に長徳寺とて女の袖屏風
けるを出す所毎年の祭礼に
寺なる下白の上に去る所に悪霊の祟を
く賣なり角ハ有りてもめづらかなる
ふと所の袖ハ今の世の仕出し女房装束山の花
もとうつれる赤ハ嘆く美女ふ表紙桑の
そに惜うべしなもと陸奥大名なる
しふ母紀と呼べし人い善家さく先に立び
参とおそ立ちくと宮ろ女法花げきと紙
同ふりうとくふな所程く素紙ふて

みらんを作くろのあいまさ十ばな所屏風
ぜんと舞の人ふ所生れ付色濃の作の所
袖ふを所屏風紀女形り家紋ゆさに下りる
色ふお ぜんの紀濃付中まい所りうん ふ用し紀
濃れうう付上ふ落ふ ふ用し紀濃のうう
付肩より表尺程あとくと赤屋乃やう庭
織乃編くれ多井乃房とうげざりうく ふり
ふ所袖ふ紀ぞとはみぐれ様 まうれ男藤も
もまうれ ふ紀常いうろ紀 びろうど紀大紋乃
石たみ一乃ふ内りしく也ふむ まびりう一紀ふ
く唐麦乃ふ紋かへし妻とうび先紀ぞうあけ

く帯乃下ゑ
のび帯とめ
けと掛
ゆ
たく中程
よさんで
よくられ
よ仕
腰ひ
きたく
ゑ



四　芋せいもせのもぐさ山

大和の国　吉野の郡の山抹背の川の中に流る祢唱十番といふる古歌拾やうに
ちはとの乃　なにらく　樵やさうりとんうえん
小海りして　名所の里ぐ〳〵さうりうくい女乃
何ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ
乃小野　萱れ　拾乃　古もとれば　絵の
撲ひ　く　い　河　玉　紙　て　色　ぞ　と　れ　く
乃　紀　月　を　寄　乃　ゆ　と　又　を　世　よ　ま　く　劣
人　乃　と　と　お　さ　れ　た　づ　女　乃　ゆ　い　た　れ　と　は
各　別　な　喜　ひ　と　民　俗　義　を　接　歌　を　作　見

あげくまま　海　と　は　美女なれ里　と　絵　う　く　よ　れ
平　れ　ん　ま　多　絵　絵　り　ん　は　う　ら　れ　あ　ま　れ　き　世
絵　ふ　ま　り　く　笑　い　ま　く　山　乃　捕　を　お　り　乃　か　ら　ば
禁　ふ　さ　ん　い　う　ま　乃　城　下　ま　り　れ　れ　ま　絵　は　た
く　乃　女　を　ぬ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
え　さ　ま　ま　猿　ま　り　乃　ま　ま　り　は　れ　た　面　彩　れ
ゆ　ま　く　出　業　屋　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
絵　ふ　乃　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
い　ふ　美　う　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
兵　庫　出　れ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
う　ん　ふ　絵　絵　の　ひ　ま　や　ふ　白　う　ま　ま　く　ま　ま　ち　ん　の　ま

しろりとけ・猫妻激乃金入の 革むくさたの
革ぶ不ふ人 ぶけ紙つけぬりか さしめりされ
らんとうを色 いろてきあ〜ふたいしめ 法華いや
たな所楽作 張ふくきろ新しかる 発をあれ
人乃指あ〜 ぬんろとを形〜く之形 ふぶろ〜あ
ヨ〜革履 たの紙さ紙たやきさるやうに おをられ
ゲとの乃紙 徒ろ〜ふそれんろ年 乃役ナ〜ろ
ふふをせよ いまくあ乃ほかを格ろ くの見ぞ
けれびふ乃 畜世新巣さで 学ふ ようくまと
さ〜細紙を ろ〜や耳ちのさか〜びなろ〜あい
く首さで ふの びれろ〜けの 大鳴田ふれい

うをゆびの乃ふ ふ中巻年むさび 先ハ一文字ろ
たく唐紙乃 さ〜掃ふ切金れ 打箔仏経乃角
柿枝ふ表貝 乃打箔ふ麻ふ乃下 巻中巻麻
ふ〜ふ〜ふ麻 ふ乃表面式尺三寸 乃袖下おびろ
横ろ乃ふ ふ色つ〜を織ぬふ ちり 白糸乃
綱紙ろけく 表紙仕出〜乃ろ〜乃張びくけめ乃
角ふ表ぶとけろ りく白ろんふれ二重 内貝紙ろ
乃綿ふびふ河乃 紙紙つけ ふ乃れハ
表ふろ乃ふ地 乃つぶら巻ふ麻地 こ色やうあり
箔れ金入とろ〜を巻ぶ巻でより乃 紙紙つ
けく張ふ内下 女ふ花色 満自傷 乃勝出〜ふ

此ほやの巻

みるよしや吉野の里人男女にかぎらず立出
数年乃花見にはなれ中にも
見物一古今乃まれなれば所に都乃ありし
むかしもかゝる女は得さきもぬふそ乃程
なる今乃京の花見目にも見とつくく
見とめ名所に川またひとつ乃流れ不意くい
名ある流れと清水を下こに飛まよりしま
清泉乃あまたありこえりきろし大きな泉
えん所味乃らんかしい見も塩梅なりがたし
以下り

西鶴俗徒然巻五

目録

一　金乃土用干
伽羅の口紅
内證にあはぬの事
国光八正銘
天神のおろの御中出
口紅しや猫乃ふん
定まる百日大念

二 仏のためは常燈
遊女の為の菩提催
新町の女郎十三日
むかしへぐちの全盛
三浦小御前きるゝ尾
浅草の久兵衛か投節
あんまるの思ひ出物

三 町七番目の分限
又一番の貧者
よしなきて京の縁徳
兄弟三人思ひ役者
ましくの道々ふ
見とりも中々時ならり
女郎買の身の仕廻
なりけり

一 金は五月千仕舞のほし
私ども女乃名所にて金銀を費ふとは定めての
ひとつ此世を捨つひかしられ大臣の杖はこと。
さても上長者町に住まれ浄家にちかづきむよ
ろしき事だらりとかんむすび祇女めまれてん
さ遊興に痛しぬ身後世をおもひの杖くるべき事よ
かへりず。勝文より三代藤原の廓大臣の遊興にあそびて二千人
奈の男かんふ傾せて年中を暮しぬ此新文を
乃時門跡様へ百五日あげて乃かは釜かれ申
でも四ずヶ所物部川よ流て紅の七川の肉の
指のさうしてへまうりきは祝何程とらふまへら
きつゝとのなし腰元つくひの若衆とふへ廓女新流れ

乃時尺相のびーと張り弓張い毎年六月朔日こ
だんの方角手をあそばーたるよ。新たの源氏一段
よ百ぬづ行くもうとうまーていまるくんのもよう
らざ侍ると明るもなしなーなる家家のもうあてほ
こうと排ひ箱よ相こめて封を付。一月よ三段づ
ぶかぶうもなく風よ蕃らまてけあもうさーき
小刺ども寄くうめく幸大りこあーずたぬく就人の
かーが原ものよ出番ーてつのよ揚角のもにもう
らず南ーて野良宿の花ようもあーず。一生男を抱
ずに指ちる姫乃ごとくうたい揚やとちーを三段
事稲小霧年よのてかくと上於なーよりあっ時だて
まーいうぬいーえ侍ふ刺月やと箱を付付あそだて

そ後ハ方角ものもずいろぶ大家の事の揚ひやら。
大ふうーにぬ事ものもーず年ひそーく隠ーし。
嵐代の物ぬけ今ー時ーあーて岩系たえ藏
そもくれ野秋よかーを物れーさハ米兵信の細
道ーとーふ侍通筆の紙青碓て。すぐに芝拡
ありてお村吉ふよ蟇ハりメれよりハ又毋ぬ口よ
れーけ。ちぐーも揚宿をえず芳宅てゆめ仕
扶のごくぬ。世の角りのたさうぶ年くーあきし
小刺箱。あけれの付ぶけーよーもなふ踏すく
なく。今ーあるぬ時やりく揚と客上てさても
つーぞ今銀紅たーの小ゆくあ行。十ハ年けりーは
ぬ万八ぬ振よなをーて千六百八張ぬ月ぬ扶

天酒宮

酒中苑

和泉国堺のいとまくそもつらりず。是ぞ名高き
よ極楽寺殿さまよりの日本国の惣石
つくりがらとめいよりの石をとれば是をとれば
一日より千貫目そもきひ屋にてもきぬ石
乃名所ぞ。是を国まで沢山ありてもつよ
石をこそなし。是老所の名所大石ある三石
杉の山切てとゆり石。是程乃時もやあるまじ
をものかはるして色をとるべ。智恵の伯ゆり乃
設乃貝とも奉掘出。何の子細もなく嶋の
ゆるよ如てもなをとゆるゆるゆ。男八月の時乃
名ゆしひなゆるよ呂石の四完まで奏かるひ
奏石をとゆるゆ。やはるるひ乃ゆるをとて

拍子おいらへ石の酒振なげ[illegible]乃間のまち
けのうそをとんもすだうりはか何もなし名がら
初とゆ嶋ゆ。さあぐ分別とするにさ
なぐ京ゆて業笑うをすく色乃
んえん時拍子にのりて大隅よりぐり世
ゆのうけうらへ動しゆ嶋乃屋敷をあげ
けし。嶋乃名ゆとゆ原者をにしてそれば
色も能野の新ゆよかるも作ぐ[illegible]て[illegible]
とゆ門ゆよ負せうゆうさびしく[illegible]
杉ゆもれぐ。宮ゆよ嶋伝もせずけ為尾かゆ
うきゆより天満天神乃ゆ屋敷ゆ花屋の重業
すゆぬ。色ゆ為乃ゆ杉嶋ゆ花屋の重業
拍子のあんやきして面く

いふも笑止がば女房出て茶の間につゞひしこゝ
よしこに案内もやうくなげきをいひて打こぼん
け。間ド摂州兵作り若の天王寺と出し紫咲若衆や俵
物きさを誂つくり時分は遠ひの鐵子をも六日とりよせ
おりしくかるひ世帯もと柳よやりて桜田を高原将
酒中花よ云ひけ。若衆そ小織をとれやしになほか
えん飼し川より濡はより打ちのみつまぬ天王寺の東社よ首
竹のあやしき小袖乃後なる橋の北の原あまり宮社
をつまそ通りがけよ天分し寺利もあまりしにかき
陸男の上太布よりかく如果るなりとひさまれぞさら
するむかしの如来を祭て打ふしいは利宝へも湯ひ
こまれぞし若かりけ寿し情も家来月見のよふの

ものてまつ隙と。いふもんは自身よりにぐる桜の下に宮古の
市も分てそ後ハけ法師を越中間にまいて細工
つめて挑灯ぞこ宮そうじす御寺もどす。ろう口借
かゝりしに出方るが出るに御よし飛脚のうへ二もの格の香具を
うけとふハ。ふたゝや浪人悪如がくく喧ずるよ見ぶが脇し
さ勝ぬきの一子さ座をとらんとする時。夕の御膳とてま先
めいく杉焼。少きもつくしの四季初鰹よもとつくこゝをろうけて
出るかゝる御調菜にもめ方あらしてそ。ふ率ず打ちかひ
よみのすぐ時の気よなり以て町人すがらくだされても
ゆころま笑しくも御用も時。なけれ師の仰せら違
しハ今宵はれさりけるいあなめもと大分の御祝義
まはえ丸軒の師どもくにこらしそ一首とあるを

ありしは此四月よりは、多年ふりて大いなる今の御年よりまし川
持ちまゐらし。此奴僕等に陰のそこの御理をさとり
後悔にうけら達御小身なんと鋭なり。此中に
なからねとて再びそれ名の末なり。まつ今も猶
さらせん御方にまつて飲みあ。存ぜれずして是なる
御目出度と申ひける。鬼角何をすゝめまして住居
我の身の上を奉られ数年居なずれば、師宗の方ヘ
出入いたし、家にして住居のうちの四郷山。一つ身乃
つれ〳〵にめくりて我をあつけにつきても定めず
さきの曽母へつかへと出羽で見えし小姓御しつて
御もたれ奴時まで、再目大きなるも古今のとおし
それとも随分ちからはとさらさかねず。かしらから
うらみしは顔をひねりて世出すひざ枕して、おりしの
んでは奴はみ法師御様にて候。あなたとの御かげに世
よの御身のうちを見る事とすゝめまいらすべし。沢山おもふすゝし
まよひつとあれども内氣なく、よしなくてかなりしより
あられだよく是つて事の何よりやすへは法師様
てやみきれなんとくぶんの中ゑんをすげ出す時は子まで
が香料にゆつかげんして、梯子の御座敷もせず
にも御様なれ。寺中之川あてやまくら参しへまで
いやのまゝのきもしや事もなり、百両のお大の遠慮をくひ
しめ去ぜらくあられも見届り。たらくゆへの御通り
かうゆ時、法師さ夜光やなれぬと候御様つうん
で御座ぞ又。めされの御あても和る事をく大かた御座

傾と金つかんとされど。これ鐵ハ志津のハまつ條
に大方は男むかしハ一擲に百両も惜まぬ太臣
乃かく記ける事ハ三時代とえ志りもと見めて姫
君んぐりて。相模の國まで志びしくぞ是を
據にそれど。女の名を世のなきの手を見ぶかりける。
是にも恋氣海りしてとして宗旨おれ物を持すこ
しぐさりませのといひかゝられてハ無てすがあ
りのと。金銀を蓄て娘どし乃あすこめなつて
こゝ隠先をとつてくる金銀をひもさ
ぐりて見しハ合體女乃かくし男にとらへし。
こ夜りのをこ千とめのん宛て子するに似ありくる
まづ時子移りてかくあさましく嘆果情も

二

佛の爲の寺方檀家の爲の僧
を爲にて夕せさらぎれありとハいへど。比翼の契
をむすびてかりし家業ハ疎かにし。人を相手に強
まつを志けるハ三千世界の所〻に地獄あり。大坂にて所
ながん世間をとりしかのみならず。此所の女良遊女下女
千六百余人毎日の浮氣沙汰めいく賑ハす家業とも
姫ぐんなされど。一人一日とをまゝつとりて一貫やる
時ハ五貫八百目にて済事なれども。揚屋遊女の
をつ數都あて屋〻の酒肴を取て遊女揚女
酒肴道すべし。是ハ請ともなり候てみな世は
けいせいの好男をも生ずべし。誠山の果ハいたく

常住いたるものどもしてくめづらしかるべきことく
はかりのことを聞きのりれゆゑ釈迦牟尼仏
そもそもあるべきなほたぐひ
こと制限まして かるべきふぞくの孫たち
いふ事仏。同じくなるべきなり
なる初めの年 はじめよりはじめ
ゑびしと盛りあるべし 仏法いまぞ極まりぬべしと。
しかるべきよしてあるべし 人のぼれば
ゆゑ仏法七日人の衣裳よりなりて
ぐめこそてこそ 仏こそ
のべくよ初めてあるべし極楽とぞ

兵法

碌ひまなく言ちらくなれども云人に先へ去りしまき
門はよりてる尾く夜相伴りとはぞ引の傍人これ
紀伊国の隅をとえて太科理人へきてしかく方へなるらの
者あやあ作をされまでし宝永の蔵ちはしろ勝立
承めいさや揚脇されはけも丈浄るりの目付指
悪目相人事は浄瑠璃三年もとん中にて形なる。
いかにも女とあまりもこれ是はまれ不届なれぞ。
けんの事は傾をけるいへ女郎り傾城になるべし。あまは
ある屋の議女百人の能書きにて人をさとらし読人
相もひきとりけぬれどもいろは原大みそるものもありて
懇親なるも住むぎとしれなれはおきてすて縁組相しらず

いなり浄瑠璃といは四月に持出されて今の都太夫
座摩に繰するまなひちやうぢより相也何某方へし
こつき無安ぐるひの始末がなす公界なり。手代
とて揚る招きはあらず。何ぞ世にて文字をまはる部をもな
町にあし無き相ぞうし。浄瑠璃の名代ぐらなりけり
これ座はむかし町の太夫十九年けいこに竹本方二千
両の金を。後家の弟は親を頼みに入て出にけり
了簡くらて揚屋へまして此店の銀にあつまりて
わるい愛しもりんぐずして世話人かくすとたてまつりし
松りふくちまつりひ果し。今は堺町まで又世間の
正人後ある丸本書。義太夫より芝居見しやく

三　四千七貫目の分限と成り
銀三万七百貫目拵て大きなる宝をもつ
又多年抽精とゝん所ゝ
法いろの分限ハ七貫目乃ものゝ
よつて〳〵銭道具たりとも大分なりし金銀
ゆすらまてハ一生貧乏ハ
てもあるべき事なり
なき拵ものゝ
いたゝてらんていまゞ十五年のうちよ
と賣拂ひ三〇一和ゝ借銀すまひしてかゝ
ゝなりぬ世ハ三年ぬ
大ゝ〳〵として今ハ弟屋よ高利かりして一百貫

しよ出ておてゝ拵ゞあるゝ
拵ゝ虎皮の黒くを
りゝ弟ハ三〇和ゝ
ゝてゝん和あつまれゝ生
つゝまゝ
なりゝ賞ゝ
仕ゝと姫ゝ
拵をさらゝ
さゝゝまゝよゝを付て
城田家ゝ
ゝまゝ

さしものく生れかはりして和尚よりけゆすき。男乃
悪人れ事を行ふ玉よりんハ大きんになれん中川ハち
よみれかほるまゝ奴中男女ハ悪行の天狗たる衣まゝ
なりぬ世にある時の衣をハ因果のつめ免りきぬめる皮
乃條れおもくゆめやし。さきんいひそまる女をとなりて
あをさらくさへし変りて今れやうまかしてけさま衣
行ちなげく事なり。衆の異見をもきかず肉を
退出させて男女のりぬるも宮なりの不似と云ひ
てこの像の縁ハ勧め合せてきかせしきさせるを
よふ此和尚ひのへ和尚よ洞にすえさせ。救絶なをとめさせて
けるれ和尚ハ惣割。通り和尚さ陽にさ揺あらせ

陽をたはすこゝれ猿のまとうき名あり。陽きよ。初父の
年忌にゑあらし陽して汗水を流しまますでも陽ね
あまりせぬ。きへ子千悪日で大陽さ悪ひ陽あると。
わたさ数事をいのるけさん和の中子京する文公
芝居より後く役者アへきこまつらして陽すにすに
ちらなるして上ちそもあろうそふなる手和ハるち
到前をなとひ次の陽が早もよおのハ救まのりかさ
し光の者りその三諸人と道中をいゐきしが月会
の形みて美濃路にまゐりけ辻蔵に強きをもう
ずさしゐとさてらくゆれもあき陽ほに師のすく
やまゆす陽ちの座をはいもなし此三人ハ立て

がき僧ハ主僧にて實によりまかせてもあり今までてん
ちゝめ其夫人藝藝にかゝ僧となりても主僧りの事のけて
をとかくてはこびの身とも世に花を開しれんと。
直筋に相なひ今酒をそなけても世の中北川あるよ我
く見さしす年一とんも船をいひ、思ひよしずと日
く人世ぬよきてあぐ川て少刻すくめぬしてやうく
京よまいれのぞり出て男ぶりハよし、容貌もよく
ハ御化なりしる縁喜がゆにおさかへず。我ひそ
かに狂言をうけて見んとす。三人まづつけの世の僧
乃年よりあるが抱しと以年もなくずさりとて
相りし頃つくみて稽古の道だくりの道くこみるべし

と文箱ひしていそぎ勝をみせそうんのゆる雲
人して僧ハ三人首桶つて依見乃文町へ京より
乃花しとハなりぬ。直切の男をさせて道くよ男もを女
すら僧まれども。親よりゆづりのれや女業をそもげうん
にそ新るゐ魔くを浄るなくこまかりもしれに
えんじやうさせて世間を田男子ゑよりてしうき世
随よなりて六年あまりて筆目の氣晴しよ世良
きうひハす僧あかりもて。さる法師の浄りおくれ
しかわかふず道にの住ミしかの六分の刻さうんの時
わべき而よあなくぞ尤もうとうけ而なし

元禄八乙亥歴孟春吉日

書林

京堺町御池上ル町　平左衛門

御免蛭町　八尾甚兵衛